

今回は法傳寺 衆徒の小森弘基です。

お浄土とは、還えるべき安心の太いなるふるさとです。

私たちは、あさはかで人情が薄く、親しみ愛することを知らず、些細なことで争っています。人は互いに敬愛し、施しあわなければならないのに、わずかな利害のために、互いに憎しみ争っています。身分の違いや、貧富の差、老若男女を問わず、みな財欲や色欲のことで悩み、あれこれと嘆き苦しみ、少しも安らかなときがありません。ただ己のみのことをだけを考え、他人に恵むことを知らず、欲に追われてあらゆる煩惱を働かせ、その結果によつてまた苦しみます。栄華は続かず、すべてはうつり変わります。苦しみ悲しむことは解つていても、み教えを聞くことがなく、目の前の快樂におぼれ、飽きることを知りません。このような人の仕業は、自然の道理に背き、人の道に外れています。これがあるのままのこの世と私の姿であります。

阿弥陀如来は、このような、私たちの我見、我執による苦悩に満ちた日々、迷い、不安や、対立をしながら娑婆に執着し続ける私とこの世を、穢土(へいど)煩惱から抜けられない衆生の住む現世)として見抜かれ、一方、浄土は死の事実に向し悶々とする、凡夫の私たち一切を包みこみ、拠り所とし今も導いて下さっている処です。浄土は阿弥陀如来の仏国土。衆生を救いたいという願いに報いて完成した真実報土です。涅槃界(さとり)の世界)であると同時に、衆生救済へのハタラキの源であります。

その浄土に生れさせていただく私とは、仏の智慧と慈悲にめざめさせて頂き、世俗の中で道を求め、やがて縁つきて、大いなる安らぎの世界へ帰らせて頂くと共に、今生の日々にあつては、如来の教えに背く己の生き方を省み、翻つては、現在のわが国の有り様、世界の趨勢(すうせい)をしっかりと見極め、本当の命の在り方とは何か、幸せとは何かを考え、傲慢な自分のみの歩みとせず、共に手をとって合つて、み教えに開かれた道を歩んでいく身とらせて頂くことです。

